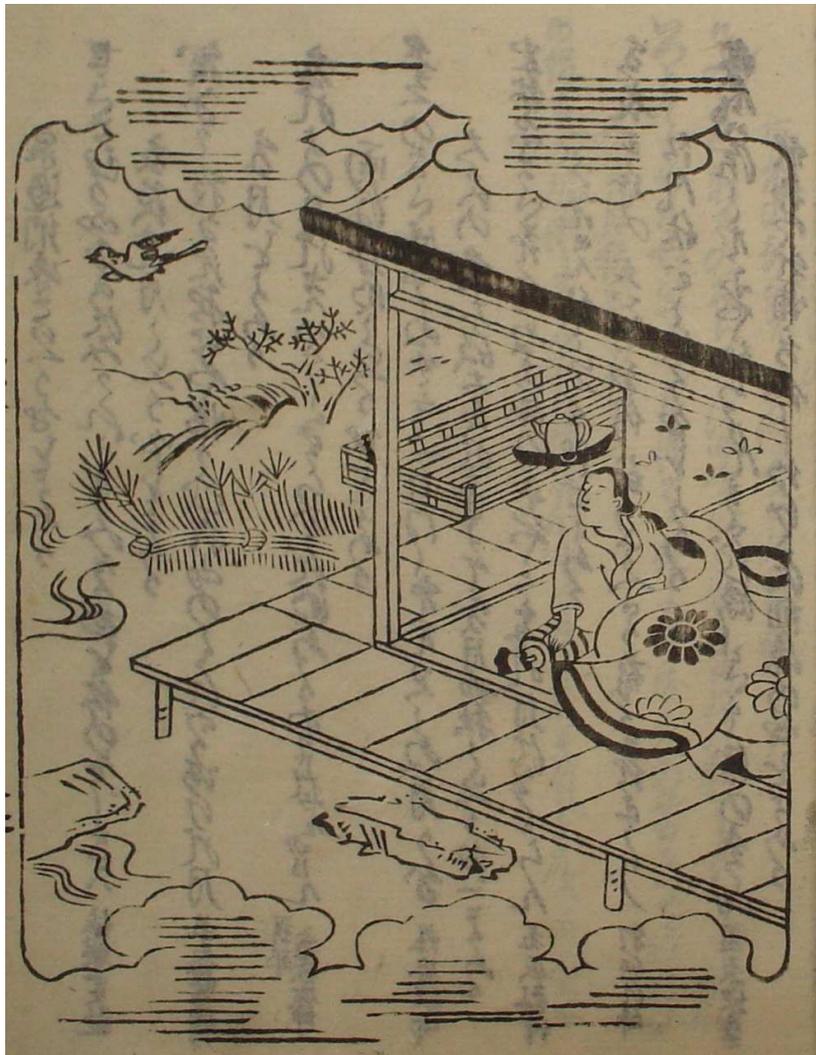


第110回貴重書展

# —歌書の版本—

期間 平成18年6月16日(金)～7月1日(土)



鶴見大学図書館

## 展示書目

\*は個人蔵

### I 江戸前期の出版

- |                             |                                     |                     |
|-----------------------------|-------------------------------------|---------------------|
| 1. 古今和歌集 (伝嵯峨本)             | 江戸時代初期刊                             | 袋綴 2冊*              |
| 2. 古今和歌集両度聞書<br>(参考) 詠歌口伝書類 | 寛永15年(1638) 風月宗智刊<br>江戸時代初期写 三条西家旧蔵 | 巻1欠 袋綴 7冊*<br>継紙12通 |
| 3. 堀河院百首                    | 慶安3年(1650) 刊                        | 袋綴 3冊               |
| 4. 六百番歌合<br>(参考) 六百番歌合 古活字版 | 承応元年(1652年10月) 刊後印<br>寛永末年刊         | 袋綴 10冊<br>袋綴 8冊     |
| 5. 奥義抄                      | 慶安5年(1652年5月) 刊後印                   | 袋綴 4冊               |
| 6. 竹園抄                      | 寛永21年(正保元年1644) 刊                   | 袋綴 1冊               |
| 7. 愚問賢注                     | 寛永19年(1642) 刊                       | 大本 1冊               |

### II 絵を持つ歌書

- |            |                      |                  |
|------------|----------------------|------------------|
| 8. 古今和歌集   | 須原屋茂兵衛刊              | 袋綴 2冊*           |
| 9. 千載和歌集   |                      | 袋綴 2冊            |
| 10. 貫之集    | 元禄13年(1700) 須原屋平左衛門刊 | 袋綴 2冊*           |
| 11. 桐火桶    | 塩屋忠兵衛刊               | 袋綴 2冊            |
| 12. 大和詞歌物語 |                      | 小本 2冊 (全3冊のうち下欠) |
| 13. 歌仙金玉抄  | 松会版                  | 袋綴 3冊*           |

### III 模刻資料

- |                                       |  |                  |
|---------------------------------------|--|------------------|
| 14. 古今和歌集 (契沖筆)<br>(参考) 古今和歌集         | 文化9年(1912) 吉田四郎右衛門他刊<br>天和貞享(1861~1867) 頃写 契沖筆 | 大和綴 2冊<br>列帖装 2冊 |
| 15. 賀茂社歌合                             | 文政元年(1818) 佐々木竹苞楼刊                             | 折本 1冊*           |
| 16. 小倉色紙 (集古十種)<br>(参考) 小倉色紙 (伝藤原定家筆) |  | 袋綴 1冊*<br>1軸*    |
| 17. 千とせのためし                           | 嘉永4年(1851) 刊                                   | 折本 1冊            |
| 18. 梅園奇賞                              | 文政11年(1828) 刊                                  | 大和綴 2冊           |

## 版本の不思議

和歌の文献学的あるいは書誌的研究、すなわちそのもっとも基礎的な研究が、近世和歌の若干の例外を除き写本中心に進められてきた事実は、書写資料に相当程度恵まれていることを思えば当然でもあり必然でもありました。古写本の内包する限りない豊かさを資料自体に語らしめるのが、文献学的あるいは書誌的研究の目的であり、先学によって輝かしい業績が積み上げられ、素人目に見ても、現在私たちが大きな信頼を寄せうる仕事は、所謂文学的・思想的・批評的領域にあらずして、まずこの分野においてなされたと言えるでしょう。

そして版本の世界にも、大家碩学は勿論、才能ある若い研究者の関心が寄せられるようになっていきます。1点限りの、その意味で限りなく個別的な存在である写本と異なり、複数制作を前提とする版本は、技術上の発展・より多くの人々を引きつけるための挿絵の工夫・表紙外題の変化など、工芸品のようなおもしろさを持っています。国文学の研究対象としても、特に版本となった上代から中世の和歌資料ではわからないことばかり（オ前ガモノヲ知ラナイダケダ、ト仰セラレレバ、マコトニソノ通りデス）、ここにたくさん魅力的な問題が未発掘状態で埋まっているのです。たとえば貫之集（10）の場合、先行する正保版三十六人集中の貫之集に依拠したことまでは、容易に想像がつかれます。ところが巻首の1丁は貫之略伝であり、北村季吟の『土佐日記抄』冒頭の1葉を字配りもそのままに縮小、流用したものなのです。挿絵も後補。絵のない歌集がまず出版され、ついで菱川師宣風の絵を付加したものでしょう。貫之略伝の流用に問題はなかったか、誰がそれを行ったか、そもそも絵なしの本を刊行したのはいつか、など疑問はいっぱい出てきます。

ざっとこんな具合です。今回の展示を機会に、版本の楽しさ・学術的意味の重さへ関心が向けられることを期待しますが、例によって当館の蔵書では十分な体系を整えられず、本学教員からいろいろ提供をうけました。にわかごしらの安普請、とご批判もありでしょうが、ご勘弁下さい。

平成丙戌林鐘中浣

図書館長敬白

（解題は、石澤一志・高田・中川博夫・堀川貴司が分担執筆した。体裁の不統一・不十分な点は、お目こぼしいただきたい）

## 1 古今和歌集（伝嵯峨本） 江戸時代初期刊 袋綴2冊\*

中央に刷題簽「古今和歌集上」（上冊のみ）を持つ縹色布目紙表紙（縦27.5、横19.4糎）は、他本の表紙を転用し古い題簽を貼ったもの。五ツ目綴。見返し、後補の楮紙。匡郭なし、本文每半葉9行20字程度（印刷面縦約21、横15.8糎）、和歌1首1行、詞書3字下げ。版心に文字なく、丁付はオモテ面ノドの部分に「古今下四十六」の如く刻すが、綴じの深いところにあつてほとんど見えない。墨付上87丁、下89丁、遊紙なし。下冊末に貞応2年7月22日藤原定家奥書を載せる。刻成自体は早い、掲出本はやや後刷りで版の浅くなった所あり。下冊第57丁ウラに「古今」の文字が見え、題簽と一致する。本文の版木余白に題簽を彫った例はめずらしい。

伝嵯峨本は古今和歌集版本中最初出であり、その書風から嵯峨本の類かとも考えられている。所謂正保4年刊二十一代集の祖本で、「さほど悪い本文ではない」と川上新一郎「古今和歌集版本考（続）」（斯道文庫論集35）は指摘。

## 2 古今和歌集両度聞書 寛永15年（1638）風月宗智刊 巻1欠 袋綴7冊

紺色地に牡丹唐草・雷文を空押しした紙表紙（縦28.1、横20.3糎）左肩に素紙題簽（縦18.0、横3.5糎）を押し、「古今和歌集抄 三（～六）」と刻すが、落剥多く判読困難である。每半葉11行、版心「古今抄巻二（～六）（丁数）」。原装・原題簽を残すけれども、全体に虫損あり。巻六末尾の丁オモテに貞応2年本奥書を掲げ、ついで「伝受之後宗祇庵主・・・文明四年五月三日 平常縁在判」の原識語、同丁ウラに「寛永十五戊寅年仲秋吉辰／二条観音町風月宗智」の刊記。掲出本は『古今和歌集両度聞書』の最初の版であり、刷りも美しい。次いで万治年（1659）版・宝永6年（1709）版と続き、宝永版が最も稀少、ただし後のものほど当然刷りは落ちる。

文明3年（1471）正月から4月、同6月から7月にかけて東常縁（?～1484?）が行った両度にわたる古今集講義を、連歌師宗祇（1421～1502）がまとめたもの。写本と版本とでは内容が相当に異なる。

### （参考）詠歌口伝書類 江戸時代初期写 三条西家旧蔵 継紙12通

薄手楮紙（縦14.1糎）を継ぎあわせ、古今切紙伝授資料を中心として『詠歌大概』の注、「神道口伝事」等を長短12通に書写、各巻表紙なし。書写時の状態のままに伝わった。血脈に「素暁常縁一宗祇一逍遥院一称名院一実澄一公明」と見え、書風もまた三条西流であるので、三条西公明（公国、1556～1587）までの伝授資料か。詳細は、本学教員伊倉史人氏の発表に就かれない。

## 3 堀河院百首 慶安3年（1650）刊 袋綴 三冊

縦26.4糎、横18.0糎。浅黄色地無紋紙表紙に、四周双郭刷題簽「堀河院百首 上（中、下）」を左肩に貼付。版面は、四周単辺縦22.4糎、横15.9糎。每半葉十行、和歌一首一行、作者名は和歌と同じ行の一番下に記す。注刻はなく、丁付けはノドにあるかと思われるが、見えず。「慶安庚寅四月望 雲堂大居士跋」（慶安3（庚寅）〈1650〉）と記された跋文があり、さらに刊記「御書物屋 出雲寺和泉掾」があるが、刊年を記さない。跋文とくらべ刊記はその線が明確なので、この部分のみ入れ木か。丁数は上冊が、27丁（28丁目は後見返しとして表紙に貼付）中冊27丁（28丁目は

後見返し)、下冊28丁、それぞれに目録が1丁あり、下冊は、27丁が作者一覧、28丁が跋文。上冊の見返しに「寧楽廼家」下冊後見返しに「光明室蔵」と墨書するも、旧蔵者未詳。匡郭に欠損が見られ、慶安版の後刷りと判断される。

#### 4 六百番歌合 承応元年十月刊後印。袋綴、一〇冊。

褐色地唐花文様空押艶出表紙、縦二六・二×横一八・五糎。外題は、各冊表紙中央に題簽(二〇・一×四・三)して「六百番歌合 春上(～恋四)」と墨印。無辺・無界、柱刻ナシ。本文一〇行、印面高さ約一九・七糎。内題は、第一冊目録の端作に「左大将家百首歌合」。各冊の部立と丁数は以下のとおり。第一冊、春(元日宴～野遊)、二五丁。第二冊、春(雉～残春)、三二丁。第三冊、夏、三二丁。第四冊、秋(残暑～秋雨)、二三丁(尾丁は後見返りに貼付)。第五冊、秋(秋夕～暮秋)、三一丁(尾丁は後見返りに貼付)。第六冊、冬、三六丁。第七冊、恋一(初恋～絶恋)、三九丁。第八冊、恋二(恨恋～旅恋)、三八丁。第九冊、恋三(寄月恋～寄鳥恋)、四二丁(尾丁は後見返りに貼付)。第十冊、恋四(寄獸恋～寄商人恋)、四八丁。刊記は、十冊目尾丁に「承応元年壬辰年孟冬吉祥／大阪心齋橋筋唐物町／池田清左衛門」とある。印面と刊記より、「承応元年壬辰年孟冬吉祥／二条通玉や町／村上平楽寺開板」(小西甚一『新校六百番歌合』昭51・6による)の刊記を持つという承応刊本の遙か後印本か。各冊初丁表の右下に「鈴屋之印」の朱印、第一冊表紙の右肩と第十冊尾丁刊記の右脇に「西荘文庫」の朱印を捺す。本居宣長の鈴屋旧蔵で、小津桂窓に伝来。

#### (参考) 六百番歌合 古活字版 寛永末年刊 袋綴8冊。

縦27.3、横18.3糎の藍地紙表紙。痛みあって補修、模様はわかりづらいが雷文に蓮華唐草の艶刷りか。左肩に楮素紙題簽(縦16.8、横3.7糎)を押し、「六百番歌合一(～八)」と刷る。古活字版の原題簽が全冊に残っているのは、それほど例が多くない。内題「左大将家六百番歌合卷一(～八)」(巻首)、刊記なし。毎半葉12行26字程度、印刷面縦22.0、横15.2糎。連続活字を使用、やや小ぶりの文字主体に構成した版面は、寛永(1624～1644)後半の特徴を示す。古活字版六百番歌合には、11行本・「寛永十七年九月吉辰」の刊記を持つ12行本・掲出本すなわち無刊記12行本の3種があり、川瀬一馬『増補古活字版の研究』は、掲出本の如き12行本を寛永17年(1640)後間もなくの出版と見ている。

六百番歌合は建久3年(1192)冬頃から計画され、藤原俊成の判詞も加えて同5年には完成していたらしく、主催者後京極良経(1169～1203)の名をとって、当時は左大将家六百番歌合と呼んだ。100題600番1200首の大規模歌合で、良経以下藤原定家(1162～1241)ら有力歌人が参加し、左方寂蓮と右方顕昭の論争・俊成の判詞など歌学史上の意義も大きい。「源氏見ざる歌よみは遺恨の事也」と俊成が言挙げしたのは、この折のことである。諸本間に大きな揺れはない。

#### 5 奥義抄 慶安五年五月刊後印。袋綴、四冊。

墨色地卍繋唐草文様空押艶出表紙、縦二六・一×横一八・〇糎。外題は、表紙左肩に絹目地花卉文様題簽(一七・七×三・七)「清輔奥義抄花(鳥・風・月)」と墨書。無辺・無界、柱刻ナシ。本文一〇行、印面高さ、約二一・五糎。内題は、「奥義抄 序(～下巻余)」。分冊の状況と各冊の丁数は以下のとおり。第一冊、序～「廿六出万葉集所名」、六九丁。第二冊、中積・目録～「四十九 おほはらや」、

五三丁（尾丁は後見返に貼付）。段三冊、中之下釈・万葉集歌「一 うなばらや」～「七十三 ながれては」、八二丁。第四冊、下之中・古今歌「七十四 なくなみだ」～目録・尾題、六一丁。初印本の八分冊を、二冊ずつ合冊して四分冊とする。刊記「慶安五壬辰曆／五月吉日／上村次郎衛門／開板」。川上新一郎『六条藤家歌学の研究』（平11・8、汲古書院）が言う、慶安五年刊本の初印以下順次下る五段階分類のcに属するか。各冊の初丁右下に「板東文庫」、その上に「新居庫」、右上に「鳥野／蔵書」の各朱印を捺す。近世末から明治期の国学者新居守村、学習院・國學院教授鳥野幸次旧蔵。朱書き入れは、鳥野博士によるものか。

## 6 竹園抄 寛永21年（正保元年1644）刊 袋綴 1冊

縦26. 1糎、横17. 7糎。古雅な栗皮表紙（裏打修補済み）を付す。外題はなく、内題は「竹園抄目録」とあり。注刻は「竹園抄 一（～三十四）」。「丁数は33丁で、34丁目は、後見返しとして、表紙に貼り付け。一箇所錯綴があり、23・25・24・26丁の順になっているが、これは全体を裏打ち修補したときの誤りであろう。版面は、四周単辺、縦19. 2糎、横15. 7糎。毎半葉9行、和歌は一首二行。後見返しに、刊記「寛永甲申暮秋上旬刊行（朱色糸巻印二顆）」（寛永二十一（甲申）年は、1644）とあるが、摩滅激しく、後印なることは明らか。しかし、表紙と本紙の虫損跡が一致することから、近年の改装ではないと判断され、原表紙と判断したい。印記「雲之鳥／□□所蔵」がある。

## 7 愚問賢注 寛永19年（1642）刊 大本一冊

二五・九×一八・三糎、原装黄色無地表紙、原題簽無梓左肩「愚問賢注」（墨書にて「全」と付け足す）。巻首は第一丁裏から始まる。内題なし。毎半葉九行、和歌一首二行書、字高一九・七糎。全四一丁。丁付はノド（綴じ目内）中央。「此一冊以正本令書写校合畢可為証本矣／文安第二暮秋上旬雁飛雲端虫吟露／底之期也／和歌所老拙法印 在判」という本奥書あり。刊記「寛永十九（壬午）無射吉辰 河南四郎右衛門板」。「河南」以下は入木。江戸中期頃の後印であろう。同じ年記を持つものでは他に武村市兵衛版と新井弥兵衛版が知られているが、比較検討は今後の課題である。巻首に「貞直蔵書」朱陰長方印、裏表紙に墨書「元治元秋八月中旬／左多奈越／持用」あり。

## 8 古今和歌集 須原屋茂兵衛刊 袋綴2冊\*

銀泥線描（絵柄不明）ある紺色布目紙表紙（縦22. 9、横16. 4糎）中央に「古今和歌集上（下）」と刷った朱題簽を押す。表紙・題簽いずれも原装のままであり、銀切箔散らしの見返しとあわせ、版本としては凝った作り。墨付、上46丁・下53丁。巻頭に仮名序、巻末に真名序を持つ尋常の形式で、真名序末に約8行分の余白を置き、「須原屋茂兵衛梓」と書肆名を刻す。本文は無郭、毎半葉14行、和歌1首1行、詞書3字下げとするが、上冊第11・21・29・36丁と下冊8・18・38・39丁の表裏に四周単辺（縦19. 4、横14. 3糎）を画し、絵を入れる。その図柄はすべて享保頃（1716～1735）刊の9冊抄出本『栄花物語』挿絵に含まれるので、掲出本において絵を丁単位で増補したものと考えられる。版面刷り疲れが見え、おそらくは江戸時代前期に出版された絵のない『古今和歌集』が先行し、享保以降絵を加えて再刊したのであろう。挿絵の影響関係が証明される好例。

## 9 千載和歌集（絵入） 袋綴 2冊

縦22・2糎、横16・0糎。縹色布目地紙表紙。外題は、無匡郭刷題簽「千載和詞集 上（下）」を表紙左肩に付す。柱刻は「千載序（～十） 一（～四十八）」（上冊）「千載十一（～二十） 四十九（～九十八終）」とあり、上冊は48丁、下冊は49丁から成る（下冊最終丁は、後表紙見返しに貼付）。版面は無匡郭で、每半丁16行、和歌一首一行、詞書3字下げで刷る。上下とも、8図ずつの絵が見られる。松野陽一氏「千載集版本の本文」（調査研究報告15、国文学研究資料館文献資料部、1994・3）の分類によれば、無匡郭絵入第二種本に該当する。刊記には「出雲寺和泉掾」とあるのみで、刊行年不明だが、絵は、一説に奥村政信（元禄末～宝暦頃に活躍）とも言われ、そうなると、刊行年次は江戸時代の中期頃ということになる。しかし、全体的に刷り疲れが見られるところから、後印本と判断される。なお、本学図書館には、同一の版（刷りの状態が異なるのみ）がもう一本所蔵されている。

## 10 貫之集 元禄13年（1700）須原屋平左衛門刊 袋綴2冊\*

藍色無地紙表紙（縦22.9、横16.5糎）左肩に素紙題簽（縦16.6、横3.3糎）を押し、「貫之家集」と刻す。題号の下に「一」「二」とあるのは後人の墨書。本文料紙、楮。上冊46丁、下冊34丁。丁のオモテ綴目付近くに「貫上一」の如く丁付あり。本文は無郭、每半葉12行、和歌1首1行、詞書4字下げ。上冊に5丁、下冊に4丁、四周単辺（縦17.8、横14.1糎）で囲んだ挿絵を配し、丁の表裏を用いた図柄であること、絵を除いた前後の丁付が連続すること等から、本文のみの貫之集が早く出版され、後に絵を加えたと判明する。各冊末に建長元年8月「藤原朝臣」の本奥書。下冊末尾に「元禄十三」とし、入隅形の枠内に「江府書肆須原屋平左衛門」の名が見える。

上冊巻首に紀氏系図以下貫之の略伝を1丁載せるが、これは北村季吟の『土佐日記抄』から字配りもほとんどそのままに転用したもので本文とは書風が異なり、挿絵の付加と同時に持ち込まれた可能性がある。本文は正保版三十六人集の貫之集を基本としているけれども、266番歌「白雲に」を欠く。菱川師宣風の絵の出所は未勘。

## 11 桐火桶 絵入 袋綴 2冊

縦22.5糎、横15.9糎。浅黄色地無紋紙表紙の左肩に、黄土色地四周単郭の刷り題簽「和歌桐火桶 上（下）」を貼付。内題「和詞桐火桶 上」。版面は四周単辺で、縦18.3糎、横13.5糎。注刻は「|| ○」とあるだけで、丁付けはノドの部分に記される（「上（下）ノ一（～）」一部見えるのみ）。丁数は、上冊が28丁、下冊が23丁（最後の3丁は蔵板目録）、遊紙はない。蔵書印「忠麻呂／文庫印」（双郭朱陽刻）と「和歌／所印」（単郭朱陽刻）が見られるが、使用者未詳。また下冊20丁ウラ、ノドの下部に「販売所〈佐□□／五丁目〉松本自由堂」の朱印がみられる。21丁オモテに「大坂書林鹿寫献可堂蔵板目録 心さいはし筋北久□□町南也 塩屋忠兵衛」とあり、塩屋忠兵衛の刊行と知られるが、いわゆる刊記はなく、刊年未詳。国文学研究資料館マイクロ資料・和古書目録データベースによれば、某家蔵の一本に「文化七年（1810）」の年記のあるものが知られるが（こちらは一冊本）未見。蔵板目録の内容から判断しても、江戸後期の印行と見てよからう。

## 12 大和詞歌物語（やまとしかものがたり） 小本二冊（全三冊のうち下欠）

一六・五×一〇・九糎、原装薄香色無地表紙、原題簽無枠中央「〈新／板〉大和詞歌物語 上（中）」（巻数表示は小字右寄せ）。自序（毎半葉一〇行）あるも年記・署名なし。内題、「詞哥序終」（序末）「やまとしかものかたり上」「やまとしか物かたり中」（巻首）「大和詞歌物語上巻終」（巻尾。中巻尾は「をはり」のみ）「詞」（柱）。四周単辺、一三・三×九・〇糎、毎半葉一〇行、振り仮名多し。挿絵、上・中それぞれ九面あり。上巻二五・五丁、中巻二七丁。下を欠くため刊記不明であるが、江戸前期刊か。序に「女の哥ともをあつめて大和詞歌ものかたりとなづく女の手ならふはじめのたよりにもならんかともじかき筆のすさひも恥しながら書集め侍るのみ」とあるように、下照姫に始まり、女性歌人の歌やエピソードを諸書から抜き出した、女訓書的和歌入門書。挿絵は場面を忠実に再現している。他に伝本を見ない。

## 13 歌仙金玉抄 半紙本三冊

上と中・下の取り合わせ本。上は二二・三×一六・〇糎、原装縹色布目型押銀泥草花下絵描表紙だが、恐らく表面の縹色薄紙が剥落したためであろう、表と裏とを入れ替えているので、現在の表表紙には題簽痕がない。中・下は二二・四×一五・七糎、原装縹色金銀泥草花流水下絵描表紙、中央に題簽剥落痕あり（柏崎順子『松会版書目』書誌学月報別冊一〇、二〇〇二・一〇、によると「〈系図\伝記〉歌仙金玉抄 □」）、そこに墨書「中（下）」。上巻冒頭に「大意」として自序あり、署名「洛陽散人山雲子謹書」。毎半葉一八行、匡郭一四・六×一一・八糎、版心は丁付のみ。見開き一丁分を歌仙一人に宛て、略伝・「かきかえ歌」（各四首）・解説を記す。右面中央下、子持枠内に肖像と和歌を、左面中央下、様々な形の枠に歌の情景を描いた挿絵を配する。上巻一四・五丁（第三丁、人麿後半と貫之前半が落丁）、中巻一二・五丁、下巻一一・五丁。刊記「七月日 松會開刊」。天和三年の京都金屋半右衛門版があり、本書はその江戸重版本（塩村耕『近世前期文学研究』若草書房、二〇〇四、所収「俗学者、山雲子坂内直頼の伝について」）。

## 14 古今和歌集（契沖筆） 文化9年（1912）吉田四郎右衛門他刊 大和綴2冊

白の檀紙風紙表紙（縦26.4、横18.4糎）と紫の角裂は原装を伝え、一種の特製本であろう。刷・料紙・保存ともに良好だが、題簽なし。上冊の首尾、下冊の首に遊紙各1。墨付上74・下75丁、下冊第75丁オモテに「此古今集全部二冊契沖阿闍梨／墨痕也聊不涉議論者矣／文化元年三月 賀茂季鷹」と原拋写本の跋文を模刻、同丁ウラに編者百合園蓮阿（清水浜臣門下の川島茂樹、1768～1835）の識語あり。後見返しに刊記「鳥籠磐居蔵板／文化九年壬申冬発行／皇都書林／吉田四郎右衛門／吉田屋新兵衛」。当館所蔵の契沖筆『古今和歌集』に基づき、相当程度忠実に模刻しているが、原拋写本（参考）の所謂「定家仮名遣い」を「契沖仮名遣い」（歴史的仮名遣い）に改めるなど、若干手を入れている。掲出本巻三夏142詞書の「おとは山」と（参考）契沖筆本の「をとほ山」を比較されたい。

**(参考) 古今和歌集 天和貞享(1861~1887)頃写 契沖筆 列帖装2冊**

紺地に黄・白の花文緞子表紙(縦24.9、横18.1糎)、外題なし。見返し、金切箔・砂子蒔き。精良な斐紙を用い、毎半葉10行、和歌1首1行、詞書3字下げに写す。契沖手写本には珍しい装丁と料紙なので、その伝統的仮名遣いも考え合わせて、学術的意図とは異なる書写活動の産物であったろう。池田利夫博士編『契沖筆古今和歌集』の影印と解題が備わる。

**15 賀茂社歌合 文政元年(1818)佐々木竹苞楼刊 折本1冊\***

鼠色無地絹表紙(縦33.5、横15.5糎)中央に藍内曇題簽(縦21.5、横3.3糎)を押し、「賀茂社歌合」と刷る。扉に四周単辺(縦30.4、横11.9糎)を画し、「治承二年/賀茂社歌合/判者三位入道釈阿」。本文墨付37折、毎半葉4行宛の模刻を行う。第37丁オモテに「右一卷者寂連法師真跡也」以下「文政元年戊寅初冬娑々木春行誌」の刊行者娑々木(佐々木)春行識語、その左脇に「井蛙堂祐慶?」と彫師名が見える。

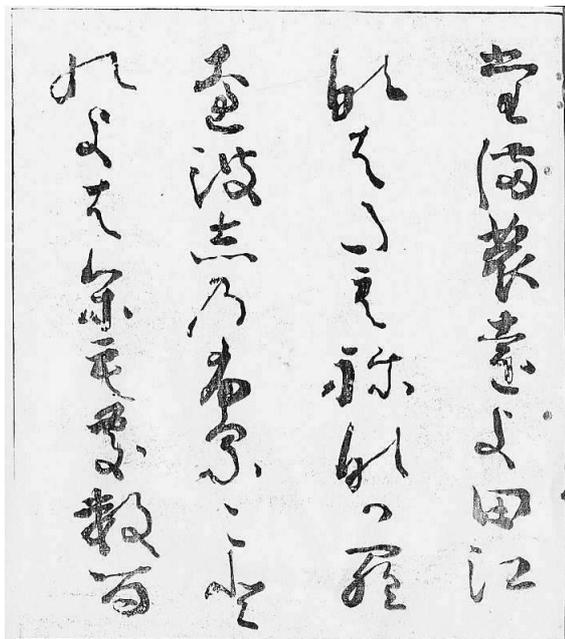
厚手奉書を用い、薄目の墨で刷るのは、江戸時代後期の模刻本にしばしば見られる手法。17千とせのためし・18梅園奇賞も同様の料紙を使用する。

内容は治承二年三月十五日権祢宜重保別雷社歌合(410)で、1番左より20番判詞までを刷る。藤田美術館現蔵の伝寂連筆残欠卷子本が原拠資料。伝寂連筆のツレは佐野切と呼ばれ、翰墨城・見ぬ世の友等に押される。金銀泥下絵を持つ美しい清書本断簡であるが、模刻では下絵を省略。

「寂連法師書/賀茂社歌合/平安書林 竹苞楼刊行」と印刷した袋を添える。なお同一の版木を用いた袋綴本も多く、そちらは料紙やや粗、一種の普及版であろう。

**16 小倉色紙(集古十種) 袋綴1冊\***

藍色地に流水・扇・紗綾形を艶刷りした紙表紙(縦25.4、横17.2糎)左肩に素紙題簽(縦17.7、横3.7糎)を押し、「集古十種 小倉の色紙」と墨書。改装であろう。本文墨付18丁、後見返しひ「この色紙はその家々の重宝にしてなかく/伝へしものなれはもとより優劣の論/にも及はずまいて憶見の取捨すへき/事にもあらずたゝ温故のたよりになさ/むとてうるにしあかひて収入するのみ」の跋文あり。藤原定家筆とされる小倉色紙33枚を模し、下絵も薄墨で再現する。巻頭の1葉は色刷り。内容はまさしく松平定信(1578~1829)編の一大古器物図『集古十種』に一致するが、版型・紙質等に差があって、『集古十種』を基とする別の出版か。このほかにまた陰刻版小倉色紙もある。



### (参考) 伝藤原定家筆 小倉色紙 1軸\*

『集古十種』は江戸時代後期に伝存した小倉色紙の台帳として今日なお有益であり、それによれば掲出の軸「たまのをよ」は「岡田将監」の所蔵で、現在行方知れずとなっているものである。あからさまに結論を示せば、現蔵者不明であるのをいいことに、これぞ『集古十種』の原拠資料よ、と言わんばかりに作られた贋作。塗箱・太巻軸のものものしいところもご愛嬌。

### 17 千とせのためし 嘉永4年(1851)刊 折本1冊

白地に鶴・瑞雲を浮き上がらせた紙表紙(縦32.4、横22.7糎)中央に「千と勢のためし」の黄色刷題簽(縦23.5、横4.5糎)を押す。題号は巻頭の図版(伝藤原公任筆大色紙)の「いにしへにありき／あらずはしらねとも／ちとせのためし／きみに／はしめん」により、あわせて優れた文物の面影を千載に伝えようと意図したものである。彫枝・摺刷ともに卓抜、丹鶴叢書の白眉と言ってよい。国文学関係資料では、伝藤原公任筆大色紙・藤原定家筆和歌草稿・伝頓阿筆色紙・伝後京極良経筆豆色紙・伝西行筆小六半切・伝慈円筆六半切・藤原定家筆六半切・伝後伏見院筆六半切・伝後鳥羽院筆歌仙絵・伝後醍醐天皇筆歌仙絵・伝藤原為家筆歌仙絵・伝紀貫之筆寸松庵色紙・文館詞林残巻・伝源家長筆和漢朗詠集切(龍田切)・三条公量筆和歌懐紙がある。

### 18 梅園奇賞 文政11年(1828)刊 大和綴2冊

雲母引砥粉色地に薄墨盤絵を刷った紙表紙(縦33.9、横24.3糎)中央に「梅園奇賞 二」の薄紅色刷り題簽(縦24.1、横4.7糎)を押す。第1冊分は落剥。第2冊末に「文政十一年戊子嘉平月摸勒／上梓森川世黄校合／浪華野梅園蔵」と隸書で刻し、雁金屋青山清吉と彫師千種利兵衛の名が見える。「野梅園」は本草学者毛利元寿(国書総目録の認定)ではなく、大坂の野里四郎左衛門であり、古筆・古文書の模刻に長じた森川竹窓(世黄、1763～1830)と親しかった。竹窓の刊行した『集古浪華帖』『浪華帖仮名』などは、現在も利用価値が高い。

掲出本に含まれる古筆は第2冊に29点あり、翰墨城から3点、藻塩草から1点が選ばれており、国文学に関係の深いものについては「古筆の模刻」(『調査研究報告』5)に影印がある。精刻にして多色の刷り佳良、紙質また上々の大型本。